

# 「どうにもならない」に陥る中学生の 援助要請行動と相談抑制に関する研究

○増田成美・石田弓  
(広島大学大学院教育研究科)

## 目的

中学生は思春期を迎え、多くの悩みを抱えやすい時期にある。悩みを解決する手段として援助要請行動や相談行動があり、中学生の悩みの内容、相談相手、性差などの視点から多くの研究がなされている。石隈・小野瀬(1997)の中学生の相談相手の調査によると「誰にも相談しない」という生徒は38%と比較的に多いことが示されている。

また、近年スクールカウンセラー(以下SC)の導入校も増加する中、SCに相談しない理由に「相談してもどうにもならないと思う」(以下、どうにもならない)という思いが挙げられている。この「どうにもならない」とは、相談しても解決しないという思いがあると考えられ、「どうにもならない」と思うに至るには、様々な要因があると考えられ、SC以外の対象であってもそのような思いが生じるのではないかと考えられる。そこで、本研究では文献レビューにより、中学生の相談できない理由に焦点を当て、「どうにもならない」に陥る要因を検討することを目的とする。

## 方法

「中学生」、「悩み」、「援助要請」、「相談行動」のキーワードを2000年から2015年の16年分に絞り『CiNii Articles-日本の論文をさがす-国立情報学研究所』を用いて、論文の検索を行った。そして、本研究に該当する63件の文献の分類・分析を行った。

## 結果

(1) **中学生の悩み** 中学生の悩みには、勉強、将来・進路、心理(気分・不安・性格)、人間関係(同性の友人・異性の友人・母親・父親・きょうだい・祖父母・先生・先輩・後輩・好きな人のこと)、身体・健康、環境(学校生活・家庭生活・いじめ)があった。これらの悩みの中から、中学生が抱えやすい悩み、性差、相談する悩み・しづらい悩みが検討されていた。

(2) **悩みと相談相手** 中学生の相談相手の項目としては、主に友人・親(父・母)・きょうだい・

祖父母・先輩・後輩・恋人・教師・養護教諭・SC・塾講師・メル友から調査が行われていた。また、中学生に誰に相談するかを尋ねる際は、自分で解決する・相談しないという項目が含まれている調査もあり、中学生の主な相談相手は友人・親(母親)で、相談しない生徒も多いことが示された。

(3) **相談を抑制するもの** まず悩みの内容から相談する相手としない相手に分けられたり、相談しづらい相手がいることが示されていた。また、相談が抑制されると示唆される文献を抽出した結果、抑制する要因・理由にまとめられた。相談を抑制する要因：①悩みを相談できる友人関係が構築されていないこと、②悩みを相談できる親子関係が構築されていないこと、③悩みと相談相手に対する抵抗感、④自己肯定感の低い状態、⑤自尊心の高・低、⑥抑うつ状態、⑦社会的コンピテンスの不足、⑧性差。相談を抑制する理由：①援助不安、②援助要請に相談の利益とコストの評価、③相談スキルの欠如。

## 考察

「(3) 相談を抑制するもの」の結果から、悩みの内容や相談相手によって相談が抑制されることや、相談が抑制されると示唆されている要因・理由により、「どうにもならない」という思いが生じている可能性が考えられる。特に、相談できるような友人・親子関係が構築されていなければ、相談先がないことにもつながると示唆されている(小針, 2008)ため、友人・親子関係の要因は重要であると考えられる。さらに、相談できるような人間関係が構築されていないことは、幼少期の親子関係において良好な関係が築かれておらず、他者との関係の構築に困難を来していることにつながると考えられる。そして、これが他者への抵抗感や自身の自己肯定感の低い状態などの他の要因へも関与していると考えられる。

したがって、「どうにもならない」に陥るのは、相談できる人間関係が構築されていないことが大きな要因となることが考えられる。